災害ボランティアネット通信

2016年版
《後編》

NPO法人
災害ボランティアネット
茨城県古河市水海三〇一九
Tel 0280-91-3090
Fax 0280-23-2281
http://saigaivolunteer.net/

二〇一六年三月十一日　三反走仮設 法要　座談会
～この五年間を振り返って　後編～

Dさん（女性）

今回は追弔法要に参加させていただきありがとうございます。5年前の今日の日は決して忘れられるものではありません。

私は尾崎に住んでいました。嫁に来て55年、町の人たちと一つの家族のように、子や孫たちと何の心配もなく楽しく暮らしていました。あの日を境にみんなバラバラになってしまい悲しい思いをしました。今このときになって改めて悲しい思いになります。

しかし、皆さんのようにラーメンを作ってくれたり、お話ししてくれたりするなかで、これから新たな一歩を明るく元気に過ごしていきたいと思います。

水浜の人たちにも本当にお世話になって、別れるのがつらくなりました。ですが、皆さんそれぞれ一人一人の生活がありますので、いつまでもくよくよしてはいけないと思っています。子どもたち、孫たちを亡くされた方々のことを思うとわがままを言ってはいけないと自分に言い聞かせながらも、涙がついあふれ胸がいっぱいになります。

尾崎ではお寺さんが避難所になりました。津波が来るということで山道を上りました。あの日は本当に寒く雪が降っていました。山から見ていて最初の波は小さかったのでこれで終わりかなと思ったら、間もなく本当に真っ黒く瓦礫を巻き込んだ津波が来ました。家や車などが混ざってきました。家が壊れるバリバリという音は本当にすごく、流された屋根に乗っていた人の「助けてくれー」という叫び声が聞こえました。でも助けることなんてできませんでした。その有様は本当に地獄の底を見たようでした。その光景は一生涯忘れることはできないと思います。

震災の日でしたが、夜の空は星空で本当にきれいでした。今まで見たことがないくらいでした。本堂に避難して、蝋燭を灯しながらでしたが、皆が一緒だったので心配や不安はありませんでしたが、学校の子どもたちのことだけは皆で心配していました。

そして3日後、学校（大川小）の生徒たちが皆流されてしまったという話を聞きました。あの時の悲しみといったら本当に何とも言えないものでした。尾崎は孤立状態になっていましたので、ヘリコプターで捜索に来る人に、手ぬぐいでもなんでも振って助けを求めました。年寄りから順にビックバン（河北総合センター）、中学校の体育館に移っていきました。私は着の身着のままヘリコプターに乗せられて、上空から釜谷を見た時、あまりの光景に驚きました。残っていたのは診療所と、私たちの母校の大川小学校だけでした。我が家がどこで何がどこなのか分かりませんでした。その後、中学校に避難して皆さんの支援のおかげで今に至っています。

Eさん（女性）

うちも小学校2年生の孫を亡くしてしまいました。津波が来た時、家の近くにある会社にいました。皆家に帰るようにという社長の一声があったのですが、何かに掴まらないと立っていられないくらいグラグラ揺れていました。

私が家の前に行くとおじいさんが「6メートルの津波が来るぞ」と言っていました。家には、熱を出して保育所を休んでいた孫とその母親がいましたので、皆で車に乗って逃げました。その時に小学校に行っている孫を迎えに行くということは全く考えていませんでした。先生たちがいるからちゃんと避難させてくれているだろうと思っていました。

お寺に着いてから津波が来るまでしばらく間がありましたが、小学校では山か校舎の2階に避難していると思って安心していました。

夜を迎えて、雪も降っていたのでナイロンの生地をかぶりながら船に乗って漂っている人もいましたが、誰も助けにも行けませんでした。1時間くらいしてから、その人たちがお寺に来ました。なんとか船が岸の着いたようです。服が濡れていたので着替えたのですが、その人たちは何も言わず黙っていました。

後で聞いた話ですが、その人たちは消防の方で、救助の途中で何人かが津波で流されて、自分たちは何とか船に掴まり、乗り込んで助かったようです。そういうことがあったのでその人たちは黙っていたそうです。

いまだ傷跡の癒えない、大川小学校跡

次の日、朝が来ると尾崎にあった家が皆流されてなくなっていたのが分かりました。朝になっても「助けてー」という声が聞こえていました。でも誰もそれに応える人はいませんでした。

私も「がんばって」とか声をかければいいのに声が出ませんでした。なんであの時に声が出なかったのか、今でも残念に思います。

お昼頃に男たちが港の方に行ったら船があったので、それで助けに行きました。だけど、船もエンジンが壊れていたので、船を竹で漕ぎながら助けに行っていました。屋根の上に男の人と女の人が毛布に包まっていたようです。後日、私たちのいた避難所にその人たちは元気になって来ました。でもその時は咳をするとまだ砂が出てくると言っていました。

私たちが車に乗って逃げた時、なんで小学校まで迎えに行かなかったのか。迎えに行けば孫を助けることができたのではないかと今でも悔やんでいます。今でも毎朝仏壇に向かって、「ごめんね」と孫に謝っています。「夢でもいいから、ばあちゃんに会いに来て」と言うんです。すると、こたつで昼寝していると笑顔のいっぱいの孫が走ってきたんです。「あぁ来てくれた」と思ってびっくりして目が覚めると本当に残念でした。あの時、私たちだけ逃げずに迎えに行ったらと今でも思います。そのことを夫に言うと「今そんなこと語ったって終わったことだ」と言われるのですが、なかなか諦めきれません。私の姪の孫は、姪が迎えに行って助かったのです。ですから、うちの孫も迎えをどれだけ待っていたことかと思うと、かわいそうでかわいそうで。

決して震災はまだ終わっていない、忘れないということをまた今日改めて刻み、また茨城に戻って考えて模索しながらこの活動を続けていきたいと思います。

これからも一緒に笑いながら、泣きながら、いろんなお話を聞かせていただければと思っています。

福島県の汚染とその現実（後編）

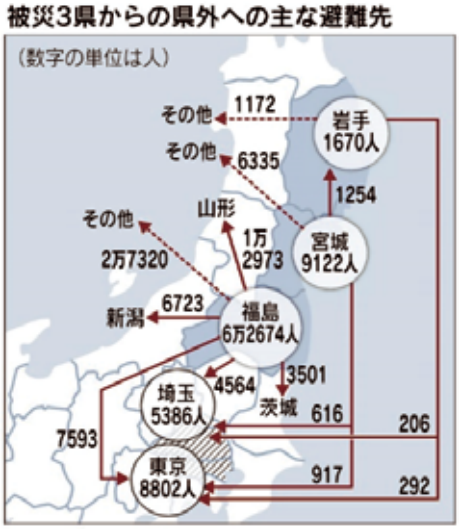
～南相馬市 原町別院にて～

【生き方の多様性を認めない怖さ】

一番いま困ったなあと思っているのは、風評被害を巻き起こしている人達がいるという論調です。例えば福島にいま学童保養という形で県外に出たり、あるいは福島から県外に避難している人達がおられますが、避難している人達そのものが、実は福島の風評被害を生み出している元凶であるという論調が、福島県内で起こってきています。

ましてやこれから「20ミリまで安全だから区域解除しますよ」という話に、なっていくに違いない。浪江町とか大熊町とか富岡町とか。それでも帰らないと「じゃあもうお金出しませんよ。帰っても大丈夫なんですから」と。線量が下がって、国が20まで大丈夫だと言っているのに帰らない人達の存在そのものが、福島の風評被害や福島の人達へのいわれなき差別を作るんだ、くらいの論調が張られ出し始めています。非常に怖いなあと思っています。

福島の人達と、避難した人達と、住んでいる人達と、それぞれでしょう。それぞれ自分達の選択で生活の基盤を作ってやっていけばいいのですけど、そういう多様性を認めない雰囲気が非常に日本って怖いと思うんですね



（日本本経済新聞　2016年8月4日版）

【避難を支援せずに帰還を支援する体制】

原発事故被災者子ども支援法という法律が民主政権時代にできて、予算もついた。それは、原発事故があって福島から県外に避難している子供達の為にということで始まった法律でした。ウクライナなんかではチェルノブイリ法という、移住する権利だとか、学童保養する権利だとか、いろんなことを決めた法律がある。日本もそれと同じ法律になるかと思ったら、結局ふたを開けていま自民党政権になって、帰還支援法になっています。避難した子供たちが、あるいは親子が、福島県に帰還をすると、その時に受け入れる方の自治体で、南相馬とか川内村とか、帰還事業に使うお金になっています。「避難を支援する」のではなくて、「帰還を支援する」法律になっているっていうことです。

では、線量はどうなの？　放射能の汚染はどうなの？　というと、全体の空間の線量は下がりましたけど、探せば危険な所もたくさんあります。今ここは0.12とか0.13とかっていう数字ですけど、それでも仙台に比べたら3倍4倍、除染してもその程度ですから。その位の線量はありますけど、当初と比べれば3分の1～4分の1に下がったと、地元に住んでいる人間にしてみればだいぶ下がった、もう大丈夫じゃないの？　と思いますけど、汚染の無い所に比べると5倍10倍はまだあるわけですよね。でもやっぱりそれでもそこに安心して住みたいっていう人の気持ちも分かるし、だからもっと選択の多様性を認めればいいのですけど、今の日本というのはそれを認めるような雰囲気、特に今の福島の場合は認めるような雰囲気はないですよ。これはますますそうなっていくと思う。

【実害を風評被害という言葉に置き換え、問題をすり替える】

福島の経済復興というのは、みんな自分の故郷に帰ってそこで生活をもう一度始めることだ、と。それは決して悪いことではないが、問題は安全性です。その安全の担保は「国が20ミリまでは大丈夫だと言っているからです」と。でもそれは担保にならない。実際子供たちの小児甲状腺がんの多発は福島県の県立医科大学も一部認めだしています。しかし、多発は認めるけれども、原発事故との関係は認めていない、という状況です。

子供のいない町というのはどうでしょう。陸前高田なんかでもそう思いましたね。故郷に戻りたいという年配の人たちの気持ちもよく分かりますが、街の復興は年配の人だけでは無理です。三代先ぐらいまで見て行かないと、街そのものは元に戻らないでしょう。福島県はもっとかかるでしょうけど、時間がかかればかかるほど、若い人や子供達というのは避難先で生活の基盤ができてしまう。

今春の避難指示解除を目指す4市町村と抱える課題

自治体	解除対象の住民数	主な課題
南相馬市	3662世帯 1万1663人	居住制限区域の放射線量を不安視
川俣町	556世帯 1183人	農地の除染が完了していない
葛尾村	418世帯 1355人	村内に医師を確保するめどが立たない
川内村	19世帯 52人	村内の指示区域外や村外への定着が進む

※対象住民数は南相馬が15年9月末、その他は16年2月1日現在

南相馬でもそうですけれども、農業がその次の孫の代まで引き継げるかといったら、もう諦めていますよ。子供や孫に田畑を継がせても農業で果たして生活ができるのか。お米が獲れたりしても、誰か買ってくれるのか？　と思うからです。すると県の方は「それを風評被害というんです」と。「風評被害というのは農家の方にも責任はありません」と。では、東京電力にも国にも責任があるかというと「それもありません」と。「風評被害というのは買わない人たちが悪いんですよ」と言うんです。なぜ買わないのかという、市民運動家や、福島から県外に避難した人が「福島は危ないんですよ」と皆さんのお仲間で言っているでしょう？　って。「ああいう人たちが風評被害を起こすんだ、あいつらが敵なんだ」というように、いつの間にか話をすり替えようとしています。

けれども実害なんですよ。その実害を風評被害という言葉に変えることによって、被害者がいつの間にか福島の農産物を買わない人達にすり替わっているんですよね。そういう恐ろしい構造になっていきつつあります。そうなると福島の人達は同じ原発事故の被害者でありながら、敵と味方に分かれて分断していきますね。どっちもそれぞれにそれぞれを認め合うようなことがあればいいんですけれど、そうはさせないというような人達が実はたくさんいるんですね。

（⇓図　毎日新聞　2016年2月20日版）

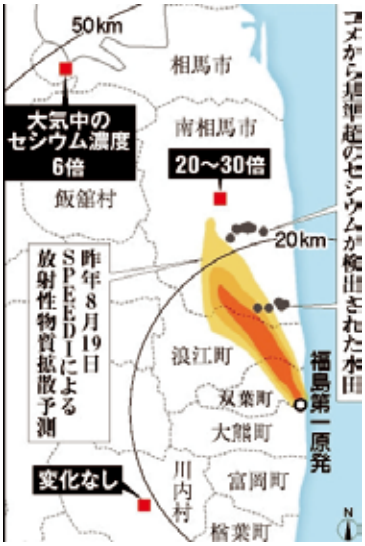
【帰還推進のために真実を隠す】

ちょっと怖かった話があります。これは一昨年でしたけれど、去年の今くらいの時期のニュースで、内容はその前ですからおとしの夏の話をしています。8月19日の話です。

〈ニュース音声〉

「福島第一原発のがれきの撤去作業で放射性物質が飛散し、20㎞以上離れた水田を汚染した可能性があることが分かりました。農林水産省によりますと、南相馬の19か所の水田で、去年秋に収穫された米から基準値を超えるセシウムが検出されました。

去年8月中旬に出始めた米に付着していることなどから、農水省は、8月に福島第一原発で行われた大規模ながれき撤去が原因だった可能性があるとみて、東京電力に再発防止を要請しています。」



（朝日新聞　2014年7月16日）

この説明会が南相馬であり、僕も聞きに行きました。国のお役人と、東京電力の人が来て、その時に何て言ったかというと、**「1時間当たり1兆ベクレルで、大体4時間で4兆ベクレルほど放出してしまいました」**と。4兆ベクレルといったらとんでもない数字なので、これはもう一回賠償してもらわないといかんぞという雰囲気になったのです。

ところがその時に、これは南相馬市側からの意見でしたが、「今南相馬に若い人が帰ってくるかという話をしている時に、原発の収束作業でそんなに危ないものが飛んでくるなんていう話になってくると、誰も帰ってこなくなるし、農作物がますます売れなくなるので、これは大騒ぎしない方がいいんじゃないか」と。みんな顔を見合わせて「そうだね」という話になって、「それはそれで置いておいて」という話になってしまう。これが一番怖かったですね。

4兆ベクレルと言っていたのが、次の日の新聞には1兆2千億ベクレルという、約4分の1の数字で新聞報道がされました。最終的に3カ月ほどして原子力安全保安委員会の出した答えは、**「実は一切出ていません」**と（笑）。

国は**「飛散していません」**ということにしてしまいました。非常に恐ろしいことになっている。

【一番怖いのは人間かもしれない】

結論的に言うと、地震も怖いし津波も怖いし、もちろん原子力の事故、セシウムとかプルトニウムとか放射性物質も怖い。けれども、一番怖いのはやっぱり人間かもしれませんね。

津波は高台に逃げればいいし、放射能だってこうやって集めるとか逃げるとかね、遠くに離れれば、ちょっと距離離れれば安全になるし、食べ物も気を遣えばいいんですけど、やっぱり人間っていうのはそこで生活する限り、人と人との繋がりは切るわけにはいかないんですから。その中で生きようと思うと、人間が、一番怖いと思います、僕は。つくづく最近、それを思っています。でも、怖い人もいるけれど、人は人によって救われている感じもするので。たった一人だったらいいのかというと、一人では生きていけないですよね。そんなこと思いますよね。

本文編集　平野喜之 氏
テープ起こし　川崎なつみ 氏

線量計とマスクをもって生活する幼稚園児
（2012年 福島県二本松市）

熊本地震 ～支援活動とその現状～

２０１６年４月14日、九州中央部を震源とした「熊本地震」が発生しました。被災された皆様に対し、心よりお見舞い申し上げます。

当ＮＰＯも、地震発生とともに活動計画を立て、物資支援・配食活動などを行ってまいりました。

支援活動日	活動内容
4月21日	生活物資の送付
5月9日～12日	熊本市の現状視察 ラーメンの炊き出し
6月5日～7日	現地視察。現地団体との会議。資金援助
6月14日～16日	ケンチンうどんなどの炊き出し
7月19日	イベント「御抹茶と小物づくり」開催

もっとも大規模な炊き出しを行ったのは、6月の炊き出しです。その際に見た熊本の現状、その際に感じた熊本の人々の様子を、炊き出しに参加したスタッフの手記という形でご紹介いたします。

熊本支援　活動報告

豊田　直来

今回は6月13日から5日間の日程で熊本地震の支援活動に向かいました。13日早朝に古河から車で九州に出発しました。

翌日のお昼から御船町のスポーツセンターでラーメンの炊き出しをしました。御船町はテレビ等ではあまり取り上げられてはいないところなのですが、大きな被害を受けている地区であり、センターの中は避難生活を送る人たちでいっぱいです。食べなれていない醤油ラーメンをおいしいと食べてくれたのは素直にうれしかったです。

その後、夕食の炊き出しは同じ町の田代地区という山間の集落で行いました。ここでは地下水の流れが変わってしまって水が張れなくなってしまっている田んぼが目立っていました。働き者の農家の方が多い地区のようで、いつも日が出ている間は農作業に出ているので夕食は遅めのようです。学校帰りの子供たちと一緒に、農作業に一区切りついたおばあちゃんたちが多く集まってくれました。

この日は大牟田組の坊守会の方々も炊き出しに協力してくれて、かき氷、ぜんざいをふるまってくれました。生活は大変だと思いますが、みなで和やかに談笑して食事をしている場がとても尊く感じました。暁月さんという方が自己紹介してくださり、「また必ず会いましょうね」と声をかけてくれたのが印象深く刻まれています。

15日は再び御船町スポーツセンターでの夕食の炊き出しです。メニューはけんちんうどんでした。当日の昼過ぎから大牟田の明正寺さんの台所をお借りして、坊守さん方と一緒に夕食のために野菜を切って準備を始めました。

けんちんうどんは茨城のご当地料理なのですがなかなかに好評で、お代わりにきてくれた人もいました。私は初めてキッチンカーの中で麺を湯がく係りをしたのですが、多くの人が並ぶ中でずいぶん焦ってしまいました。ですが待っている人たちの方がゆったり構えてくれていて、並びながら隣の人と談笑しているようでした。こういう場を作り出すことこそが炊き出し支援の大事なところなのかもしれません。この炊き出しでは大牟田組の三池さんが一緒に手伝いに来てくれてとても助かりました。

16日は益城町での活動です。益城町はテレビ等でも多く取り上げられている通り、今回の震災の被害が最も酷かった町です。熊本市内から益城町に向かったのですが、町が近づくにつれて地震の傷跡が深く見て取れました。倒壊した家、亀裂の走った道路。傍目では大丈夫そうに見える建物も立ち入り禁止の行政の張り紙がしてあるのが多く見受けられ、ぱっと見以上に被害は甚大なのだと思われます。炊き出し場所は益城町保険福祉センターというところだったのですが、とても多くの方が避難生活を送られていました。

ここでは醤油ラーメンの炊き出しを行いました。「何時から始まるの？」と楽しみにしてくれている方が何名もおられたのが印象的です。お昼ということもあり、比較的年配の方が多かったように見えました。何名かの方とお話したのですが、だいぶ疲れておられるようでした。あまり泣き言を言わないように、気を張っているように感じました。被害の生々しい現実です。その中のお一人が「こうやって来てくれるのを楽しみにして生活してるの」とおっしゃってくださり、支援活動の大事さを感じさせてもらいました。

震災後まだ二ヶ月の熊本の状況は大変なものでした。なんとか生活していくのに精一杯の人たちがたくさんおられます。待っている人たちの存在を感じさせられました。それに応える、「なにかできたら」という思いを具体化する活動を皆としていきたいと感じた熊本での支援活動でした。

今後、これから

東日本大震災により被害を受けられ今尚、苦難の生活を強いられておられます皆様にこころよりお見舞い申し上げます。

２０１１年３月11日、大多数の犠牲者と甚大な被害をもたらした東日本大震災から５年が経過し、２０１７年３月11日で６年をむかえます。

多くの方々の尽力によって少しづつ復興は進んでいますが、今だ、被災者の方々は仮設住宅での暮らしを余儀なくされています。

海で生きていた方々の高台移転はまだまだ時間がかかり、住宅再建や仕事などの経済問題をはじめとするさまざまな問題を抱え、今も困難な生活を強いられているこの現状では、「復興」にはまだまだ時間がかかると言わざるを得ない状況です。

今後、復興住宅へ生活の場が変わっていきますが、今まで仮設住宅で築いてきたコミュニティーが解体され、「孤立」「孤独」が問題視されてきている中、どのようにコミュニティーを再構築していったらいいのか？　これが今後の大きな課題となります。

これからも現地へ行ってこの目で確かめ、「風化」させないために本当の現状を伝え続けていきたいと思います。

「忘れないで下さい」

被災地で何度も耳にしてきた言葉です。それは、苦しい現実、受入れ難い事実と向き合いながら、生きている人がいるということでした。人々の声をこれからも聴き続けていきたいと思います。

ご協力のお願い

「ＮＰＯ法人　災害ボランティアネット」は、現在も様々な災害で傷ついた人々の支援活動を行っております。

活動内容にご興味ある方、活動を支援する志をお持ちの方は、どうぞ左記のＱＲコードから、**「ＮＰＯ法人 災害ボランティアネット 活動ブログ」「オンライン寄付」**をご覧ください。

ブログでは私たちの活動を随時更新しており、**オンライン寄付**では24時間御寄付を受け付けております。

皆様の温かい志を、どうぞよろしくお願い申し上げます。

←ブログ

←オンライン寄付

編集後記

２０１２年、支援活動の一環で「みんなで歌を歌おう」というものがあった。世代を超えて歌える、懐かしい歌の数々が合唱されたが、ただ一曲、「ふるさと」だけは、誰も歌えなかった。

いかにいます　ちちはは
つつがなきや　ともがき
やまはあおき　ふるさと
みずはきよき　ふるさと

あれから5年、この歌を歌えなかった方々は、もう歌えるようになっているだろうか。

線量計の数値に切り刻まれているかの地を思いながら、はかない願いを紡ぐ。

（文責・大内崇久）